森の木魂（こだま）

2022 年 10 月 24 日発行　第 8 号

目次

・森と生きる生活スタイル…… 1
・「お茶会」にお出かけください…… 2
・第 3 回里親植樹…… 4
・生きていられることに感謝できる生活へ…… 6
・私の日常生活を支える森の役割に感謝…… 7
・生物社会に生きる心得 …… 8
・エコ散歩始めました…… 10
・鎮魂の意味を風化させない森づくり……11
・森は友だち・編集後記……12

森と生きる生活スタイル

地球が悲鳴をあげ、私たち人間に警鐘を鳴らしているのではないかと感じるほどの自然災害が世界の各地で発生しています。

地球温暖化による気候変動の影響は、強烈な「熱波」が欧州を直撃し、水不足や山火事が発生、今年だけでも東京都の面積の 2 倍を超える 4,500 ㎢余りが消失。米国でもテキサス州で 46.1 度の熱波を記録し山火事で 2,500ha が消失しました。パキスタンでは洪水によって国土の 3 分の 1 が浸水、9 月 2 日時点で子どもを含む 1,200 人以上の死者が報告され、3,300 万人以上が被災、50 万人以上が救援キャンプで生活していると推測されています。国土は淀んだ水に覆われマラリアやデング熱が発生。パキスタンの気候学者ファハド・サイード博士は「温室効果ガスの排出量を今すぐ削減すべきだ」と訴えています。また、欧州、中国では深刻な干ばつに襲われ、コメや小麦、トウモロコシ、大豆などの収穫量が減少。価格の高騰や食糧不足が懸念され私たちの生活にも影響しているようです。これらは地球上で起きている事象のごく一部でしかなく、氷床・氷河の溶解による海面上昇、河川の氾濫により、どれほどの人間が住む家を失い、命が奪われているのかを探ってみると、「命を守る循環システムの母体は森」（故・宮脇昭先生の教え）の大切さに行きつきます。

日本国内でも 6 月以降の太平洋側の都府県では 35 度を超える猛暑が続き、8 月上旬以降は日本海側で停滞した前線が、日本各地に大雨を降らしました。九州から北陸地方、東北、北海道では、豪雨により河川の堤防が決壊・越水し、道路が崩れ、鉄道

の橋が流され、多くの家屋、商店、工場が浸水被害にあい、尊い命までもが奪われました。弘前市に住み被害にあった森びと会員からも浸水被害と復旧に苦労している状況が伝えられました。

水没し泥まみれとなったリンゴ園の園主は「リンゴ園はもうできない」、田畑が冠水した農家は「今年のコメの収穫はできない、野菜の収穫は期待できない」と現金収入を絶たれ「これからどう生活していけばいいのか」と不安を隠しきれません。

被害を受けた農家や市民は「自然災害だから仕方がない」、「命があってよかった」、「今までに経験したことのない雨だ」と述べています。同時に、伊勢湾台風の被害を基にした防災の考え方ではこれからも不安な生活が続くのではないかと気づいているようです。

地球温暖化による熱波や豪雨は今年で終わるわけではありません。地球温暖化の原因は「人間の経済活動によるもの（IPCC）」という冷厳な事実として受け止めるならば、自然災害に対する「不安」を取り除くための生活スタイルを弱者の視点から描き、実現させるためのアクションが急務ではないでしょうか。私たちは森づくりと共に、2035 年までに”森と生きる生活スタイル”が世界の常識になることを願っています。

副代表　清水卓

森びとのイベント

「お茶会」にお出かけください

森びとの 2025 年までの事業は「育樹活動」と、“心に木を植える”「啓発活動」の両輪です。今年も北半球の各国では熱波、大雨、暴風等が国民の生活を脅かし、その被害は何兆円にもなっているそうです。そこで私たちは、気候危機下の生活スタイルを考えてみようと、啓発活動のひとつである各県ファンクラブと話し合って、その場を「お茶会」として実施します。

運営委員　小林敬

気候危機下で生活していくには、命や生活・労働を脅かされる状況に少しでも備え、回避するためのアクションを起こしていかなければなりません。さしあたり生活現場や労働現場での危機感を共有し、その原因を深く掘り下げていくことが必要だと考えています。

各県ファンクラブは、まずは地域で発生している気候変動の被害と地域民の意識等を共有することからスタートさせ、気候変動が他人事ではないという自分を作っていきたいと思っています。秋の「お茶会」で結論が出ることはありませんが、回数を積み重ねていくうちに気候危機下の生活スタイルが見つかるかもしれません。

9 月末現在、計画・準備されている「お茶会」を紹介します。

●福島県ファンクラブ

東北地域を襲った大雨は青森県、秋田県、山形県、新潟県等に甚大な被害をもたらしました。福島県ファンクラブはその被害から何を学ぶべきか、をテーマに設定しています。「お茶会」開催日には秋田県ファンクラブが森の防潮堤の観察のために南相馬市を訪れます。そこで、同日は大雨被害の状況を報告していただき、気候危機下の生活に取り入れられる人間の生活観のひとつを探していく準備をしています。

日時：2022 年 10 月 23 日（日）
場所：南相馬市民情報交流センター（南相馬市原町区旭町 2-7-1）

●栃木県ファンクラブ

日本人の森と生きる知恵は、各地の先人たちが様々な体験と経験を積重ねてきた結晶です。栃木県内でも各地でその知恵は活かされていますが、ファンクラブは栃木県北部で森をつくり、その恵みを生業や生活に取り入れている方々たちとの話合いの場を設け、生活を脅かしている気候危機下の生活に何が大切かを掴んでいきたいと思っています。

日時：2022 年 10 月 23 日（日）10 時～11 時 30 分
場所：西那須野公民館（那須塩原市太夫塚 1-194-78）

りんねの森づくり

第一回里親植樹

●東京都ファンクラブ

今年の東京都はスマホのアプリで案内する日陰路を歩くという現象が起きるほどの猛暑でした。また、都民の気持ちを逆なでするような開発を東京都は進めようとしています。多くの都民は、連日の猛暑日の中で生活の中に節電を取り入れ、健康管理が欠かすことができない日々を過ごしていました。こんな中で、東京都は明治神宮外苑の 100 年以上も生きている木々を伐採して開発事業を計画する企業に許可する方向でした。

コンクリートジャングル下の路上は気温が 50℃になります。このような中での気候危機と向き合う人間の生活を話合う「お茶会」をつくりだします。

日時：2022 年 10 月 22 日（土）13 時～
場所：JR 東労組八王子地本会議室（東京都八王子市子安町 1-14-15）

路面は 60 度を記録！

都心に残るスダジイ林（目黒）

足尾発！

今年３回目の里親植樹を行いました

コロナ禍等で植樹をしたいが足尾までは行けない人に代わって私たちが木を植える里親植樹。今年３回目の植樹は９月 21 日に実施しました。台風一過の秋晴れを期待しましたが快晴とはならず、どんよりとした曇り空の下で、８名の森びとスタッフは 117 本の苗木を植えました。

今回は、７月、８月、９月に応募してくれた延べ 74 名、１団体の方々の願いと希望を私たちが受け止めて、植樹会場の「臼沢西の森」に植えました。本来は、応募してくださった月に植えるのですが、７月、８月は連日の猛暑でしたので、苗木を枯らしてはならないと思い、涼しくなる９月に延期しました。

植樹終了後には、昨年植えたエリアの草刈りを行いました。昨年と今年の草の伸びを比較すると、今年は伸びが早く、3 回の草刈りが必要になりました。幼木が草との競争に負けないように、幼木に太陽のエネルギーや風が届くようにしました。里親植樹に応募してくれた方々の願いや希望を裏切らないようにと、スタッフ、サポーターはこれから３年間の育樹活動をしていきます。

「里親植樹」は 10 月で終了します。今まで 1,118 本の木を植えることができました。応募してくれました皆さん、本当にありがとうございました。11 月上旬は足尾・松木沢村跡の木々が秋色に輝きます。里親植樹で植えた幼木たちの葉も立派に輝きます。

その後は、動物たちの食害に向き合っていきますが、私たちは冬の育樹活動で幼木を守っていきます。「里親植樹」に応募された皆様、改めてお礼申し上げます。今後、立派に育った森の観察をする**足尾版「エコ散歩」**を実施していきます。森の素晴らしさを見つけられる案内をしていきたいと考えています。是非、お越しください。スタッフ、サポーター一同が大歓迎します。

足尾森づくりチーム　加賀春吾

＜7 月、8 月、9 月、10 月の里親植樹参加者＞

★7 月参加者：岩手県（角岸禮子）、宮城県（有住亀代治）、栃木県（星野平吉、君島豊、小室光夫、福原辰雄、加賀春吾、加賀澄子、大野昭彦、大野礼子）、群馬県（高橋佳夫、髙橋よし子）、埼玉県（阿部吉弘、森泰克）、東京都（小椋常夫、岩間祐美子、岩田欽五、小野崎敏、小黒伸也、小黒久美子）、神奈川県（木之下貴弘、城本和利、鈴木正雄、遠藤政之、増田富雄、小笠原敏雄、滝沢和男、坂本昇一、太刀川修、鈴木純男、大津茂美、杉永哲也、倉茂忠、小林敬）（順不同・敬称略）

★8 月参加者：岩手県（角岸禮子）、宮城県（有住亀代治）、栃木県（小室光夫、福原辰雄、生沼武夫、小川薫、小川順子、加賀春吾、加賀澄子、大野昭彦、大野礼子）、群馬県（高橋佳夫、髙橋よし子）、埼玉県（阿部吉弘）、東京都（岩間祐美子）、神奈川県（木之下貴弘、城本和利、鈴木正雄、増田富雄、小笠原敏雄、滝沢和男、坂本昇一、太刀川修、倉茂忠、小林敬）（順不同・敬称略）

★9 月参加者：岩手県（角岸禮子）、宮城県（有住亀代治）、栃木県（福原辰雄、加賀春吾、加賀澄子、大野昭彦、大野礼子）、群馬県（高橋佳夫、髙橋よし子）、埼玉県（阿部吉弘）、東京都（小野崎敏）、神奈川県（木之下貴弘、遠藤政之、坂本昇一、小林敬）（順不同・敬称略）

★10 月参加者：岩手県（角岸禮子、佐々木民男）、宮城県（有住亀代治）、栃木県（福原辰雄、清水卓、清水久子、清水朋佳、清水明日香、滝田淳、小川薫、小川順子、加賀春吾、加賀澄子、大野昭彦、大野礼子）、群馬県（高橋佳夫、髙橋よし子）、埼玉県（阿部吉弘）、東京都（小野崎敏）、神奈川県（遠藤政之、小林敬）（順不同・敬称略）

★本数：7・8 月 60 本、9 月 57 本、10 月 70 本

★樹種：ミズナラ、コナラ、コハウチワカエデ、イロハモミジ、エゴノキ、シラカンバ、コブシ、ヤマボウシ、オオシマザクラ、ウワミズザクラ、ヤマザクラ、クリ、トチノキ、ハクウンボク、カツラ

この事業は公益財団法人イオン環境財団の助成金に支えられています。

森の仲間たち

生きていられることに感謝できる生活へ

上：2015 年植樹祭の様子
左：2022 年 5 月作業の様子

私は 3 月に 60 歳を迎え、次の就労ステージでは現役時代に培った財産のひとつを後輩に伝えられればと思っています。とは言っても優柔不断な私ですので、日常生活の中で気軽にできることを探してみました。

頭に浮かんだことは、日常生活が健康的で不安のないように過ごせることではないかと思いました。どんな事でも命があってのことですから、その母体である土や森を大切にする心を育むことを楽しくやっていきたいと考えました。

私の所属していた JR 東労組(以下、JREU と略す)は東日本大震災・フクシマ原発で甚大な被害にあった方々への支援活動を今でもしていますが、そのひとつの「いのちを守る森の防潮堤」をつくる支援があります。当時、JREU 仙台の役員だった私は必然的に森づくり活動に参加していましたが、気がつけば宮城県内で始めた「いのちを守る森の防潮堤」の担当者になっていました。

それまで植物や環境問題には興味がありませんでした。何度植えても枯れてしまう苗木たち、草刈り作業を手伝ってくれる組合員への協力者呼びかけの難しさから、森づくり活動は止めたいと思うことがありました。しかし、先輩達の助言や情熱を見ながら育てていた苗木の生長をみるにつけ、木々に愛情がわくようになりました。今ではいのちの森らしく生長している木々に自信をもらっています。

今年は、日本各地で何度も豪雨被害が発生しました。世界各国でも豪雨被害や熱波による森林火災、干ばつなどが発生しています。地球規模での気候変動は地球温暖化によって引き起こされていることを実感しています。せめて自分で吸う酸素や排出する二酸化炭素の吸収は私が植えた樹木にやってもらいたいと願って森づくりを行っています。

9 月 16 日、名取市の「海岸線の森づくり」育樹作業を行ってきました。周りは他の団体が植林したクロマツの林ですが、その一角に私たちの広葉樹の森があります。カシワ、クリの想像しなかった生長と生長が遅かったユズリハやカシ類の生長の様子を見ていると感慨深いものがありました。

森づくりの活動は終わりのない息の長い人間の恩返し活動だと思っています。流行りの一過性の活動では森の恵みを持続的にいただけないと思います。だからこそ「人は地球に森に生かされているのだ」という思いを私たちの心に植えていけるような活動を、後輩たちと共に、楽しく継続して行きたいと思います。

時間がありましたら宮城県名取市と仙台市荒浜の「いのちを守る森」にお出で下さい。

宮城県　南出浩行

森の仲間たち

私の日常生活を支える森の役割に感謝です

臼沢での植樹の様子

昨年 10 月、足尾の「臼沢の森」の一角にある地に木を植えました。元々、植樹には興味があり、過去には南相馬市の「鎮魂復興市民植樹祭」に参加したことがあります。昨年の植樹は雨の中で行いましたが、当日はとても嬉しい一日でした。

大荷物を持って傾斜のキツイ階段を登った作業は初めてでしたので、傾斜が 30 度はある草地に着くとぐったりしたのを覚えています。いざ植樹を始めると、苗と苗の間隔を空けることや同じ種の苗は近くに植えないなど、当初思っていた植樹ではなかったので少し苦労しました。けれども自分が植えた苗木がグングン育っていくのだと思うと、気持ちがワクワクして楽しかったです。

その後、植樹の情報作りの参考に森びとプロジェクトのホームページを見ると、里親植樹の呼びかけが載っていましたので里親植樹に応募しました。私が植えた苗木の生長過程はホームページで観られるので、私が里親になっている苗木の生長が楽しみです。

木々は日々、私たちの心身を癒してくれます。夜に大きな公園をジョギングするのですが、桜やしだれ柳などの葉が風に揺れいる音や香りを感じると、季節の移り変わりも知らせてくれます。特に、今年は夏の暑い日が続きましたので、木々の葉の涼しく優しい空気に触れると当り前の日常がとても有難く感じます。そんな気持ちになれるのは、以前に訪れた栃木県日光市内の刈込湖と切込湖の森の美しさと雨に濡れた木々の葉の輝きに癒されたからではないかと思っています。

昨今、世界各国で森林火災が増え、やがてそれは生活に悪い影響に結びつくのではないかと不安になることがあります。2019 年にアマゾンの森林火災があった時、「地球全体の 20%の酸素供給源が危ない」という旨の情報が SNS 上で飛び交っていました。この時は、私たちの命の危機を感じました。

草木は光合成により二酸化炭素を吸収し大気への放出量を削減していることは理解していますが、乱伐や火災の頻発は草木に負荷を与えています。地球温暖化に拍車をかけていく生活を続けると、私たちの命を縮めていくことになるのだと改めて実感しています。

この度、『森の木魂』への投稿をするに当たって、気候変動と私たちの生活は分離しているのではなく、深く関連していることを学んでいます。生活の母体になっている森の役割の大切さを実感しています。私にできることは限られてしまいますが、まずは生活と気候変動の関連と向き合い、里親植樹を継続していきたいと思います。

東京都　岩間祐美子

生物社会に生きる心得

生きる心得

異常気象に怯えて思ったこと

私は 10 歳の時、伊勢湾台風の恐ろしさを体感しました。今年 9 月、「過去に類似のものがないほどの危険な台風」（14 号）の日本上陸の時、伊勢湾台風の暴風で藁屋根が吹き飛ばされないかと蚊帳の中で身震いしながら台風が過ぎ去るのを待っていたことを思い出しました。伊勢湾台風に次ぐ危険な台風 14 号は勢力を弱めて通過していきましたが、危険な台風になった要因は海水温度が過去最高を記録していたことにあるようです。海水からの水蒸気の量が増え、それが 14 号台風にエネルギーを供給していた、と気象庁は述べていました。

世界の気象現象に目を向けてみると、今年の北半球は想定外の異常気象が生活を脅かしています。異常気象の一つ目の熱波では、空港の滑走路や鉄道のレールに歪みが生じ、河川や湖が干上がる等々、各国で干ばつと森林火災が発生しました。そのために農作物の収穫が減少、水力や原発の発電供給に悪影響が起こり、河川での運搬事業等の社会インフラ、ライフラインが一時ストップしました。二つ目は大雨です。河川の氾濫や洪水などで何百万人もの人が被災し、今でも避難生活を強いられています。パキスタンでは国土の三分の一が水没しました。また、9 月下旬にはフィリピンからベトナムに上陸した台風、最大級の温帯低気圧に襲われたカナダ、数十年で最大のアメリカの「イアン」では暴風と大雨が町や村を襲い、家々を破壊し、押し流し、市民の生活を脅かすのみでなく、生命をも危険にさらしました。これまでの被害の規模をはるかに上回るまさしく想定外の気象続きでした。

日本では、猛暑の中での屋外労働や授業では健康維持を心配しながらの日々が続き、大雨では農業被害や土砂崩壊・流出による断水や停電、冠水による電車の運行停止等で日常生活が乱れました。

間もなく冬支度の時季を迎えますが、今年ほど気象予報とその備えを気にかけた生活が続いた年はなかったと感じています。5 月の GW まで降り続いた雪、6 月下旬には梅雨が明け、その後は局地的集中的大雨が降り、すぐに猛暑日の連日のなかで熱中症に注意していると、台風シーズンになり、巨大台風が襲ってきました。

このような異常気象の猛威の中で人間ができたことは、防火、救出、避難そして気象の予測と備え、そして猛暑や大雨が過ぎ去った後の復旧作業や植物が生きられる大地の手入れくらいでした。スパコンを使った気象予想にしても、測り知れない自然界の猛威には完璧でないということも実感しました。改めて考えさせられたことは、気ままな自然界の猛威は人知を超え、自然は人間の都合の良いようにコントールできないということでした。その上で、これからの生活スタイルは自然界に規定され制約されているという現実の範囲内で、自然界への働きかけをしていくことが肝要ではないかということでした。

シリーズ③

生きるココロエ

自然に寄り添う生活へ歩みたい

7月の大雨で、最上川流域の山形県大江町の一部住民は2年前と同じ氾濫被害にあいました。前回から2年経っていましたが、しかし、大雨対策が実施されていませんでした。マスコミ報道によると、蛇行している川の景観を遺したい、川魚漁が楽しめる生活を続けたい等の流域住民の気持ちが対策の遅れになったようです。命よりも地域経済活性化という人間の目先の都合が背後にあったのかもしれません。反面、同じ大雨被害に遭った新潟県村上市では、地域住民の命が第一とした50年前の水害の教訓を活かした全員避難によって、犠牲者はひとりも出しませんでした。

8月、東京都内で開催された全国学童軟式野球大会は熱中症予防のために、試合を午前中と夕方からの2部制で行い、試合時間も短縮しました(8/27『毎日新聞』)。これは、「選手の負担を軽減し、怪我の予防につなげるため」とする運営側の判断でした。この記事で私は、気候危機下の生活スタイルの端緒を見つけることができたような気がしています。

地球上の人間社会は、「自然災害だから仕方がない」とか、異常気象は温暖化に無関係という気候危機に懐疑的な人であろうと、あるいは自然環境問題は環境保護団体に任せておけばよいというような人も傍観者としてはいられないようです。現に起きている気象現象とその被害で生活が脅かされているというこの現実に向き合わなくては、今年のような生存が不安な生活が続くのではないでしょうか。

日常生活を支えている日本の社会インフラ、ライフラインは1959年の伊勢湾台風被害を教訓にして作られています。ところがこの基準では、瞬間最大風速60m～70mの台風では送電線や電柱が倒壊し、1時間に100mmもの大雨では側溝ではあっという間に溢れてしまうのが現状です。体温を上回る気温になれば滑走路や高速道路、鉄道のレールが歪みますし、その状況下での屋外労働や教育等も強いられてよいはずがありません。気候危機下の人間社会の今後は、健康被害、地球規模の食糧危機等が想定されます。生活現場、労働現場では生命を守ることを曖昧にしてはならないと思います。

人間はいつかは死にますが、新しいいのちをつないでくれる終わりのない自然界は永遠に存在してほしいと願います。私は、いのちを守り、育むことが持続的に可能なエコシステムに負荷をかけない生活スタイルを描き続け、それが実現できれば生存が安定する社会がみえてくるのではないかと思っています。

その実現に向けて、やれることは小さなことですが先人の志と情熱を“希望の松明”に灯し、森と生きる生活スタイルへ歩いていければと願っています。

顧問　高橋佳夫

東京発！
エコ散歩はじめました

第一回エコ散歩のご報告

東京都内にある目黒の自然教育園で「森」を感じる、第一回「森びとエコ散歩」を 7/31（日）に開催しました。気温が 35 度を超える猛暑のさなかであり、コロナの感染者も第 7 波で増え始めた頃だったため、開催を少し迷いましたが、参加してくれた皆様と、準備していただいた皆様にまずは感謝致します。参加頂いたメンバーは男女合わせて 10 名で、ほとんどが、「自然教育園」に足を運ぶのは初めてという方でした。

当日は、清水副代表による主催者挨拶から始まり「人間観察ゲーム」で観察力をあげたのち、全員で自己紹介をしました。手作りのネームプレートを作成して準備完了。その後は主に園内にある特徴的な樹木や、自然の仕組みについて解説をしつつメインの散歩を楽しみました。都内にもかかわらず、園内にはなかなか普段では見られないような植物や、重要な植物がまとまっていて、短い時間で多種多様な植物を観察できます。13 時半から 2 時間ほど園内を一周したあと、ふりかえりをして解散しました。参加者からは次のような感想を頂きましたのでご紹介します。初めての試みでしたが参加頂いた皆様がとても真面目に話を聞いてくださったのが印象的でした。楽しんで少しでも何かを持ち帰っていただければ幸いです。

■参加者感想（一部を抜粋しました）

・あまり植物のことは知識がなかったが、いろいろ知ることができ、植物の共生について理解できた。

・生態系を維持するために、木々や虫なども必要不可欠な存在だということが分かった。

・自然のスケールは人とは全く違うものだということが分かった。

・もともと自然にあまり興味がなかったが、自然に生かされているということが分かった。

・以前、宮脇昭先生の本を頂いたが、こうして実際に自然の中で植物を知ることができて楽しかった。

第二回エコ散歩のご案内

第二回エコ散歩は、当会の植生アドバイザー、中村幸人先生にご登場いただきます。より専門的な立場から、森の成り立ちや多様性についてわかりやすく解説頂く予定です。たくさんの皆様のご参加をお待ちしております。

運営委員　小黒伸也

エコ散歩開催概要

イベント名	第二回森びと「エコ散歩」@目黒自然教育園
開催日時	2022 年 11 月 12 日（土）13 時集合
集合場所	JR 目黒駅改札　※森びとの旗が目印です。
参加費	500 円（ボランティア保険代・紙資料代）
入園料	大人 320 円（自己負担となります。高校生以下・65 歳以上は無料；証明証必要）
締め切り	11 月 5 日
申し込み	森びとプロジェクト 電話：FAX　03―6417―3750　Mail：info@moribito.info

心のふるさと探し

鎮魂の意味を風化させない森づくり

私が応援隊の一員として森の防潮堤づくり応援を始めたきっかけは、10 年前、当時南相馬市市長であった桜井勝延さんから足尾での森づくりの話を伺ったことです。

南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊（＝応援隊）は 2013 年 2 月に結成しました。その時、私は応援隊の副代表に就任し、以降、第 1 回魂復興市民植樹祭(2013 年)から 2022 年の 10 回目まで、市民をはじめ全国の植林ボランティアと楽しく森の防潮堤づくりを行ってきました。

私のボランティア活動の内容は、植樹祭の前段準備と本番のサポート、そして、植樹地の草刈りや植樹用苗木の管理などです。森づくり作業は月に 3～4 回で、毎回数人が育樹・育苗作業をしています。育てている苗木は私たちの森作業に応えてくれているらしく、2013 年に植えたヤマザクラは幹の直径が 6cm 以上、樹高も 6m 以上になっています。森の防潮堤の主役である照葉樹の樹高は 5m 以上になり、津波の力を弱めてくれる機能はすでに十分あるように見えます。また、木々の生長とともに生態系が豊かになっている気がしています。

今年 6 月に森を観察する機会があり、その時はウグイスをはじめとした野鳥の囀り、草木の葉が食べている毛虫等を見かけました。足元には、イノシシと思われる動物の足跡をあちこちで見られました。幼い頃、森で遊んでいた植物の匂い、生きものたちの息吹が感じられました。何故か、心が豊かになっている気分でした。

森作業日ではない時、大雨や台風上陸の予報があったりすると苗木が心配になります。また、南相馬市の植樹祭は東日本大震災・フクシマ原発事故で犠牲となった方々への鎮魂の場でもありますので、その精神を風化させないようにボランティアをしています。

最近、森の防潮堤の中にゴミの不法投棄がありました。タイヤ、ストーブなどの家電も捨てられているのを見て、怒り心頭です。市役所に連絡を入れ、ゴミの撤去と不法投棄防止の対策を行いました。今までの私でしたら公共地への不法投棄にはあまり関心をもちませんでしたが、全国の植林ボランティアの願いが宿っている森を衰弱させる行為、東日本大震災・フクシマ原発事故の犠牲者への心無い行為は絶対に許せませんでした。

猛暑日が連日襲ってきた今年の夏、その上、局地的集中的記録的な大雨と被害を見聞きしていると、「自然災害だから仕方ない」とは言っていられない気がします。ニュースを観ていると、この異常は日本ばかりではなく、世界中の人々がそんな気をもっているのではないかと思います。

森づくりに関わっていると、人は森に寄り添って生きていることを学び、寄り添っていくには森の手入れが欠かせないことを実感しています。

応援隊副代表　松林英夫

森は友だち

当事務所が北区東田端にあった頃、板橋区の「はちっこプロジェクト」（板橋第八小学校開放協力会）代表の保田さんから森づくりのアドバイスを求められました。その後、保田さんは家族で拾ったどんぐりを児童たちとポットに蒔き、児童の各家で苗木に育ててくれました。

9/29、その保田さんとお会いしました。保田さんは、「南相馬市や足尾町での森づくりに役立ててほしい」と、大きく育った苗木を私たちに託してくれました。それは「里親となった児童の心と自然はつながっている、森の大切さを分かってほしい」という保田さんの願いと一緒に託されました。

「はちっこプロジェクト」は、遊びこころ全開の保護者や地域の有志の方々が、在校生や卒業生、地域の未就学児等と共に遊びを広げている会です。11/27 には、ポット苗づくりが計画されいますので、森びと事務所スタッフはそのサポートをしたいと提案し、これから話を詰めていくことになりました。

このような場は気候危機下ではとても有意義なのことではないかと感じました。そのような機会を与えてくれた保田さんに感謝しています。当日は子供達の声をたくさん拾い集め、森と生きる次世代の生活スタイルへ繋いでいけることを楽しみにしています。

運営委員　小林敬

編集後記

10 月初旬に行われた「りんねの森づくり」に参加しました。私は当日のイベントに参加しただけでしたが、計画・準備された皆さんのお陰で、気持ちのこもった植樹祭を楽しむことができました。その日は湿地と赤土のブロックに苗を植えましたが、赤土のブロックは特に岩が多く、スコップとツルハシを使った穴掘りでみっちり筋肉痛に。とはいえそのお陰でより充実感も感じられた植樹祭でした。

実は「りんね」と名付けた理由も知らずにここに至ってしまったのですが、植樹祭の挨拶の中でようやく謎がとけました。「りんね」は車輪を意味することから、つまり輪廻転生の「りんね」なのだそうです。すべての命のつながりに通じるということでしょうか。優しくて良いネーミングだと思いました。

ところで「リンネ」と書くと「分類学の父」ともいわれるスウェーデンの植物学者、カール・フォン・リンネを想起する人もいるかもしれません。いわゆる「学名」を考案した人ですが、そのお弟子さんの一人がカール・ツンベルクです。

タブノキの学名は「マキルス・ツンベルギ」、クロマツは「ピヌス・ツンベルギ」、たくさんの日本の植物に学名を付けた人でした。故・宮脇先生も「タブノキ！」がでてくると良くこの名前を出していましたっけ。

宮脇先生が参加された植物祭から 4 年を経て、足尾で再び大きな植樹祭ができました。少しづつまた元の生活に戻っている、そんな実感ができた一日となりました。「つながってまたつながって森になる」

運営委員　小黒伸也

森の木魂（こだま）第 8 号（2022 年 10 月 24 日発行）
発行：森びとプロジェクト
発行人：桜井勝延
編集人：森びとプロジェクト編集委員
第一版

〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-2-13 3F 303 号室
TEL&FAX 03-6417-3750
http://www.moribito.info/
Email info@moribito.info